

研究タイトル:

オーラル・インタープリテーションの応用的英語指導法



氏名: 鈴木 基伸 / SUZUKI Motonobu E-mail: mnsuzuki@toyota-ct.ac.jp

職名: 教授 学位: 修士(教育)

所属学会・協会: 全国高等専門学校英語教育学会

キーワード: 英語教育, 英語教材開発, オーラル・インタープリテーション

技術相談

提供可能技術:

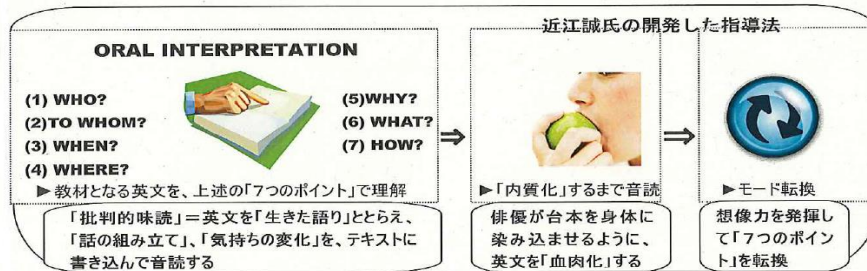
- ・英語授業法改善
- ・英語実践力養成
- ・英語教材開発
- ・オーラル・インタープリテーション紹介

研究内容: オーラル・インタープリテーションの応用的指導法

オーラル・インタープリテーション(以下 OI)は、「批判的味読」、あるいは、「インタープリティブ・リーディング」とも呼ばれるコミュニケーション形態、並びにその訓練法であり、わが国では、近江誠氏(南山短期大学名誉教授)がこの訓練法の実践研究の第一人者である。近江氏は、さらに OI をもとに「近江メソッド」(下記)を開発し、30 年以上の長きにわたって、勤務校南山短期大学で、このメソッドの実践を行ってきた。鈴木は、近江氏の指導の下、このメソッドの実践研究を 2011 年より行っている。

フランスの言語学者ソシュールは、言語を「ラング」(「制度的体系」としての言語)と「パロール」(「具体的な発話行為」としての言語)に分類した。従来の語学学習は、「ラング」の体系を覚えることに偏向していた。これは、文字や語句の本来もつ意味を理解して、1文の文字通りの意味を把握して学習が終了することを意味する。一方、OI は、英語教科書の文章であれ、新聞・雑誌の記事であれ、文学作品であれ、すべての文章を、その背後に語り手のいる「語り」(パロール)としてとらえる。

「近江メソッド」は、(1)批判的味読(=OI)に、近江氏の開発した、(2)音読による「内質化」(internalization)、および(3)「7つのポイント」(「語り手」・「聞き手」・「時」・「場所」・「目的」・「内容」・「様式」)のいずれかを転換させて話してみる「モード転換練習」、という指導法を加えることによって、「頭と心と体を使った学習」を通して、学習者のアウトプット(スピーキング、ライティング)能力を、「適切さ」(appropriateness)・「正確さ」(accuracy)の両面から向上させることができる。



OI の授業を学生に体験させることにより、次の効果が期待できる。

- (1) ひとつのリーディング素材に対して「丁寧に向き合う」態度を養うことができる
- (2) 短文の単位でなく、15 文程度から成る「意味のまとまり」単位で英文を取り込んで、「内質化」する(=表現が身体に刷り込む)ことが苦にならなくなる。
- (3) 聞き手を意識したスピーチができるようになり、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力が向上する。
- (4) 「モード転換」の練習を繰り返すことで、学んだ表現や語彙が身体に入り、長く残り、会話や作文への応用も利きやすくなる。

提供可能な設備・機器:

名称・型番(メーカー)

名称・型番(メーカー)	